

国立国際美術館
2023年4月28日

新収蔵作品のお知らせ

村上隆《727 FATMAN LITTLE BOY》とミケル・バルセロ《下は熱い》

国立国際美術館（大阪市中之島4-2-55、館長・島敦彦）は2022年度に村上隆（1962-）の絵画《727 FATMAN LITTLE BOY》と、ミケル・バルセロ（1957-）の絵画《下は熱い》を収蔵いたしました。

村上隆は、現在国際的に最も高い評価を得ている現代美術家の一人と言えるでしょう。村上は、戦後日本のオタク文化と日本美術史の平面性を接続し、同じ地平に位置付けることを試みた「スーパーフラット」という概念を生み出しました。〈727〉シリーズはその実践を見せる好例ですが、《727 FATMAN LITTLE BOY》は同シリーズの一点であり、ニューヨーク近代美術館に収蔵されているシリーズ初作の《727》（1996年）との比較においても、村上の近年の展開を知ることができるでしょう。また国内の美術館に収蔵される村上作品としては最大級の近作となります。

現代スペインを代表する画家ミケル・バルセロによる《下は熱い》は、2021年から22年にかけて当館をはじめ全国4ヶ所を巡回した「ミケル・バルセロ展」にも出品され、好評を得た作品です。バルセロの出身地であり、今も拠点にしているマヨルカ島そして地中海を想起させる本作は、私たちが直面している環境問題の脅威を強く訴える作品だと言えるでしょう。1980年代以降の新表現主義的絵画の展開を跡付ける上で重要な作家であり、本作の収蔵により当館の現代絵画コレクションに厚みをもたらすことができます。

村上隆《727 FATMAN LITTLE BOY》は、2023年6月開幕の「コレクション180/90/00/10」展（6月24日ー9月10日）に展示予定です。ミケル・バルセロ《下は熱い》も展示予定が決まり次第、お知らせいたします。

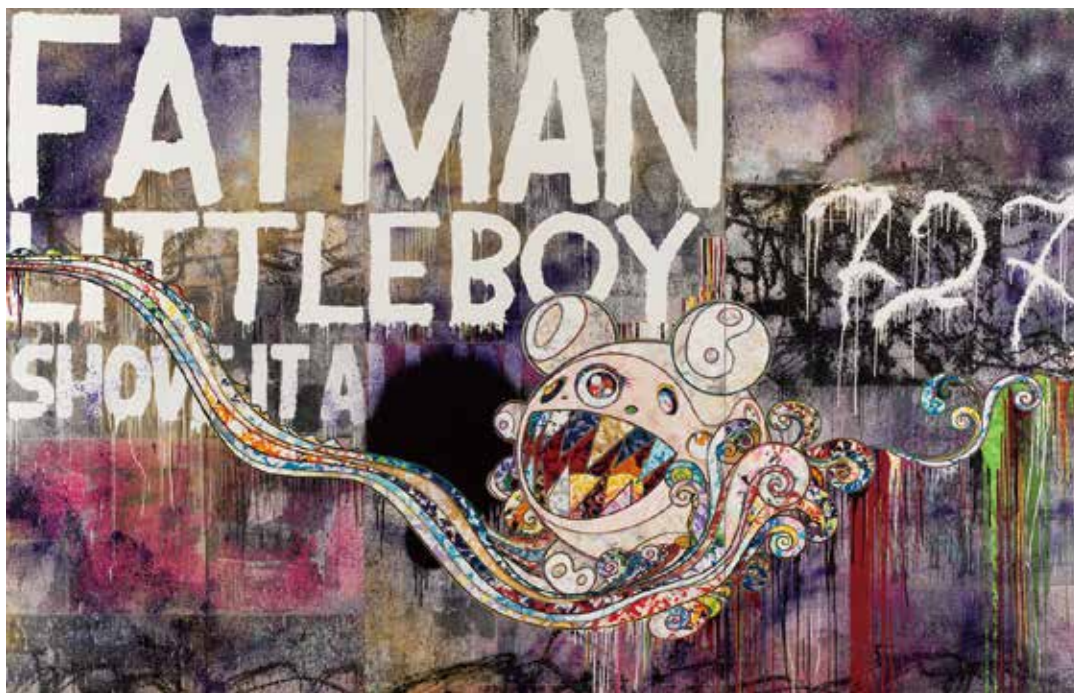
なお2022年度にはこの2点を含め計46点の作品を新たに収蔵しました。順次コレクション展等を通じてご紹介いたします。

広報に関するお問い合わせ先

国立国際美術館 広報担当 藤村 南帆

E-mail: kouhou@nmao.go.jp TEL: 06-6447-4671(直通) FAX: 06-6447-4699

村上隆 《727 FATMAN LITTLE BOY》



村上隆

《727 FATMAN LITTLE BOY》

2017年

アクリル、アルミフレームにマウントされたキャンバス

Background in collaboration with MADSAKI

300.0×450.0 cm

©2017 Takashi Murakami/Kaikai KiKi Co., Ltd. All Rights Reserved.

作品について

平安絵画の名品『信貴山縁起絵巻 延喜加持巻』に由来する雲の図像と、牙を剥く村上隆オリジナルのキャラクター「DOB君」。その背後に書き込まれた「FAT MAN」および「LITTLE BOY」という言葉（長崎・広島に投下された原子爆弾の通称）が示唆するように、本作品は、アメリカに対する日本のコンプレックスを主題としています。日本を敗戦に迫りやった戦勝国アメリカへの憧れ、その捻れを浮き彫りにするため、村上は対極的な諸要素を、同一平面上に並存させました。西洋のフォーマットに移植された日本美術の意匠、またオタクやグラフィティといった俗なる文脈の混入などは、その一例だと言えるでしょう。「SHOVE IT ALL IN（みんなくたばれ）」という俗語も、この主題に挑発的な響きを添えています。

〈727〉シリーズについて

本シリーズの名称は、東海道新幹線の線路沿いに立つ、化粧品会社の広告看板（727 COSMETICS）に由来します。実は創業者の誕生日を意味するこの数字から、誤ってアメリカの旅客機（ボーイング727）を連想したことが、制作のきっかけとなったそうです。最初の1点が手がけられたのは1996年のことで、現在その作品は、ニューヨーク近代美術館に収蔵されています。

村上隆（東京 1962-）

制作活動を本格化させた1990年代以降、村上は、戦後日本の閉塞的な文化状況をさまざまに批判してみせる作品で注目を集めました。東洋と西洋、低俗なアニメと高尚な絵画、等々といった対立を無効化する、混交的な造形が彼の持ち味です。その方法論はやがて、「スーパーフラット」なる概念として結実し、以後、欧米を中心とする芸術の世界に、自らの仕事を位置づけるための戦略として機能することになりました。

ミケル・バルセロ 《下は熱い》



ミケル・バルセロ

《下は熱い》

2018年

ミクストメディア・キャンバス

234.5×285.0×9.0cm

Art work: Miquel Barceló, ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2023

Photography: David Bonet, 2023

作品について

《下は熱い》という題名は、バルセロが好んで聴いていた1990年代コートジボワールの流行歌の一節、「水面から魚が出てくるのが見えたら下は熱い。"Si tu vois poisson sortir de l'eau, c'est qu'en bas c'est chaud"」から引用されたもので、この詩からも連想されるように、近年の地球温暖化や異常気象を暗示しています。自身が生まれ育ったマヨルカ島や地中海の自然と生き物を愛し、人間もまたその一部であるとするバルセロにとって、環境問題は切迫したテーマであり、その危機を訴えた作品と解釈できるでしょう。

ミケル・バルセロ (1957-)

現代スペインを代表する画家。パリとマヨルカ島を拠点に世界各地を巡り、その間、スイスの国連本部天井画の制作(2008)や、第53回ヴェネチア・ビエンナーレ(2009)スペイン代表などにより国際的な評価を高めました。1980年代の新表現主義の時代を出発点に、40年以上にわたって絵画、陶芸、彫刻など多彩な表現活動に取り組み続けています。